

戯曲の定義に悩んだ

土田 英生

受賞されたお二人、おめでとうございます。大賞となった山脇さんの作品、佳作の私道さんの作品、二つを同じ基準で比較することはできなかった。戯曲賞というものの恣意性と晦渋さを痛感した。最後は好みに頼るしかなかったからだ。

山脇立嗣さんの『わたしのこえがきこえますか』は聾者とそれを取り巻く家族の話だ。本人を登場させず小さな人形を置くことでその存在を示していること、視点を現在に設定しつつ過去の物語を展開させるなどの仕掛けはあるが、基本的にはとてもオーソドックスな形式で書かれている。始めた手話が「手真似」と呼ばれ、世間の理解を全く得られなかった頃の話なのだが、豊富な知識に裏打ちされたリアリティが同時にドラマを効果的に動かす機能を果たしていた。特に手話通訳の清原を九州の人にしたことが秀逸だった。京都で生まれ育った和美に当てられる九州弁。そのコミカルさと残酷さが哀しさを生む。物語のためだけに創作されたものではなく、実際に九州出身者が多かったという事実があるからこそその厚み。兄の時代を超越した信念。私は読みながら涙が止まらなかった。惜しいと思うのは、ドラマがひっくり返るポイントである父親が決断をするきっかけの書き込みが足りないことだ。そこに物足りなさを感じた。

私道かびさんの『いきてるみ』は身体についての短編四章が連作のように並べられている。視点が角度と距離を変えながら「身体」に迫っていく。第一章でセイと名付けられた主体が自らが置かれた状況を認識していくまでの台詞には興奮した。修辭的なだけではなく、丁寧に選ばれた言葉が確実に事情を明かしていく。左脚の欠損を受け入れるまでの時間がスローモーションのように広がる。一章から四章まで似た作品は一つもなく、最後まで読み終わった時には肉体の概念が変わってしまったような奇妙な感覚になった。思わず自分の体を撫でた。ただ、この第一章と第四章に関しては上演した時にどうなるのかという想像ができなかった。戯曲の定義についても考えさせられた。

土橋淳志さんの『その間にあるもの』。複雑な設定を破綻なく書く技術には確かなものがあった。災害の外側にいた人がどれだけ簡単に忘れていくのか。その手法と仕掛けの一つとして公共広告機構のCMが使われているが、これは受け手の世代にもよるだろうし、そこに頼ったことが私には気になった。

キタモトマサヤさんの『われわれは遠くへ来た、そしてまた遠くへ行くのだ』はオープニングが秀逸だ。土砂に流された集落の中、事態が徐々に明らかになっていく。会話はやがてそれぞれの懺悔などに展開していく。周囲にいる女性が大地や母なるものを想起させるのだが、書き手が男性だということも手伝って、そのイメージにひっかかりを覚えた。

三枝希望さんの『かもめごっこ』。チェーホフを下敷きにしながら「劇団」の人々の群像が描かれる。私たちにも思い当たる嫉妬や苛立ちが見事に台詞になっていた。ただ、人の出し入れなどがずいぶん乱暴な印象だった。「昔の男性が言いがちな冗談」があり、それが私には気になった。そうした人物を描くにしても、そこに作者の視点が欲しかった。

田辺剛さんの『透明な山羊』。作家が残したテープを聞くというアイデアが芯を捉えていないもどかしさを覚えた。台詞は達者なのに分かりにくかった。選考会ではマタイによる福音書との関連についても話題が出ていたので読み返してみたがやはりスッキリしなかった。登場人物たちに関しても存在の仕方が曖昧に思ってしまった。

近藤輝一さんの『バス・ストップ』。若い頃の自分の祖父や親とバス旅行をする。ファンタジックなロードムービー。ただ、これもどうにも分かりにくかった。一読してただけでは登場人物の関係が繋がってこない。二度目に読んでいた時、やっと相関関係は理解できたが、その理解も頭の中でだけ行われる感じで、納得できるところまでいかなかった。